C104（夏コミ）合わせ新刊『魔剣士サラ＝フィンク』傍伝集『真実の鏡』の巻頭収録作品から冒頭を切り出し、折本にしました（「ぺらふぇす2024」合わせ）。
ほんのちょびっとだけの抜粋ですが、何とな～く作品の雰囲気を味わっていただければ幸いです（汗）。


トラムのこと〈抄〉
～『魔剣士サラ＝フィンク』傍伝集『真実の鏡』から～

初版発行：2024年8月3日
頒価：0円（無料配布）
著者：定行美佳（筆名／野間みつね）
発行元：野間みつね個人サークル　千美生の里
発行責任者：定行美佳
連絡先：https://mitsune.jp/
（※メールフォーム有）


©2024　Mika Sadayuki

★この本の一部または全部を、著者の許可なく転載・複写・複製・改変等することを、堅く禁じます。





ふた月ほど前から、ケルリ王国の都ニフティスに幾つもある所謂“冒険者の店”に、古代魔道王国時代の呪文書しか探さないという若い魔道士がやってくるようになった。

そんな噂を耳にしたのは、リファーシア新暦四九四年の、春も半ばの頃。

まだ二十歳過ぎたばかりと思しき若さなのに、冒険者パーティーに加わるのではなく、依頼人として冒険者パーティーを雇おうとするのだという。

「そいつ、生意気って程じゃねえけど、なーんかムカつく奴でさぁ。俺が失敗した鍵開けを、魔道でちょいだぜ。だったら最初っから自分で開けろっつーの」

顔見知りの盗賊が、ギルドの受付で他のギルド員に愚痴らしきものを零しているところへ通りかかったアタシは、受付に用がある体で歩み寄ると、油を買いに来たついでといった風情で「なに、パンタ、どうしたの」と気楽な口調で会話に紛れ込んだ。

「おー、ピクシャ、久し振りだな」

……いきなり挨拶代わりに耳を撫でられるのは嫌なんだけど、アタシの白茶の猫耳を見た奴は、その辺の仔猫でも構うような感じで触ってくることが少なくない。アタシが猫目猫耳のキトゥン族とのハーフなのは事実にせよ、ホントの猫じゃないんだから、いきなり耳はやめてほしいのが本音。……まぁ、此処は我慢我慢。

「何か嫌な仕事でもロクなもんじゃねぇ……ちょっとムカついたのは確かだな」

「ある意味、嫌って程じゃねぇけど……ちょっとムカついたのは確かだな」

「鍵開けを魔道でちょい、って、パーティーの新人魔道士の態度が悪くってさ。……っていうか、まだ若造のくせに、一丁前に」と「雇いまス？　魔道士が？」と小首をかしげたアタシに、顔見知りの盗賊パンタは「そうなんだよ、まだ若造のくせに」と口を尖らせる。……自分が二十代初めの“若造”だってことは棚に綱じ上げて。

「……えーって？　雇いまスだよ」

「うんだと？」

「そうだとも！」

悪かったな！

「占代の呪文書しか探さないとか言ってさ、遺跡で古代金貨が出ても魔法工芸品が出ても、もっとも嬉しそうじゃねえんだ。自けるったらありゃしねぇ」

素養がない。……情報屋でもある他のギルド員相手なら「これ以上知りたいなら無料でってことはいしゃあ」と銀貨の幾許か請求されただろう。でも、パンタには“情報は金になる”という意識が棒なのだ。ってことじゃないんだ。

「まぁ、見付けた魔法工芸品を借りしゃあ、そっくりそのまんまの売って俺らの報酬に上乗せしてくれたから、そっくりそのまんまっ

たんだけどさぁ……っ」もっとも盗賊の誇りってのがあるんだよ！」

それを度忘れしたりゃ捲えねぇよ……」

ブタンは“盗賊としての誇り”とか言って、同調し過ぎない程度に同調しつつ、その“古代魔道王国時代の呪文書しか探していない”という若い魔道士“の情報をもたらす詳しめにしかタダでは教えない。

教えに愚痴をぼやき出して気分が上向いたらしいパンタが去ると、受付に座っていたギルド員のピム――まだ四十代の若いベテランで、ブタンと同じく盗賊且つ情報屋である――がニヤニヤ笑って「儲けたな、ピクシャ」と話し掛けてきた。

「ルーズで情報料なしで聞き出そうとしてたでしょ。ブタンは、そこにちょっと乗っけてもらっただけだよ」

ブタンが自分の猫耳をピチチッと引っ張りながら返すと、ピムは「バレてたか」と苦笑した。

「その魔道士に興味持ったんなら、もうちょいと仕入れてる情報あるぞ？」

「銀貨二〇〇枚？　結構張りこんでくるあたり二〇ヤルンくらい買う」

「ム！、別の欲しい情報と引っ　ンなんで？」

「高レベルの魔道士が居ないそもそも入れそうにない古代遺跡の情報と、未踏破って保証まではなければ探索に尽くされてはなさそうな古代遺跡の情報。取り敢えずトゥルリの国内か、その周辺まで」

「だ、その種の情報込みで二〇〇か……話せるっていう減るぞ？」

――夏コミ新刊「真実の鏡」収録「トラムのこと」冒頭より